

# がん治療の今

■■■15

## 血液の三大がん

多発性骨髄腫は、白血病や悪性リンパ腫と同じ血液の「三大がん」の一つで、Bリンパ球が成熟する過程の最終段階である「形質細胞」の腫瘍です(図1)。全身の骨髄に広がり、骨髄腫細胞自体が骨を溶かすため骨折しやすく、骨病変のための疼痛を伴うのが特徴です。

最近の統計では、1年病気で、男性では70歳で年間10万人当たり15人、女性では80歳で30人弱の新規患者が挙げられます。

西胆振管内は高齢者が多いため、近年は患者数が増加しており、製鉄記念室蘭病院の60歳以上の患者比率は、全国との比較で15%も多い傾向があります(図2)。

65歳以下で心臓や腎臓など臓器機能が保たれた患者は、自家末梢血幹細胞移植によって生存の延長が見込めます。

製鉄記念室蘭病院は、骨髄腫に対して自家末梢血幹細胞移植を積極的に行っていきますが、骨髄腫は高齢者に多いため、実際のところ、自家末梢血幹細胞移植の対象は全患者の20%以下(製鉄記念室蘭病院では10%以下)と、極めて対象が少ない

## 多発性骨髄腫編

# 数年内に数種類の新薬

骨髄腫は高齢者に多い治療方針として、骨髄腫細胞自体に対する薬物療法と、骨病変に対する支持療法(放射線照射や手術またはビスフォスフォネート・デノスマブと疼痛管理)が挙げられます。

以上から、骨髄腫では移植ができない患者さんでも新規薬剤が使用できるようにになりました。この3剤の新規薬剤によって、5年生存率は約70%まで改善しました。

また、今年から、ポマリドマイド(商品名ボマリスト)、パノピノスタット(商品名ファリアダック)が登場しました。

多発性骨髄腫に対する新規薬剤の開発は日々進んでおり、近年中に数種類の薬剤が登場する予定で、さらに生存率が上昇すると思われま

製鉄記念室蘭病院は、北海道臨床血液研究グループの中心的役割を果たしており、新規薬剤を組み合わせた寛解導入・地固め・維持療法による生存率向上を目指した治療を行っています。その成績は極めて良好で、全国的に注目を集めています。

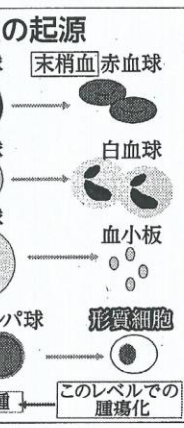
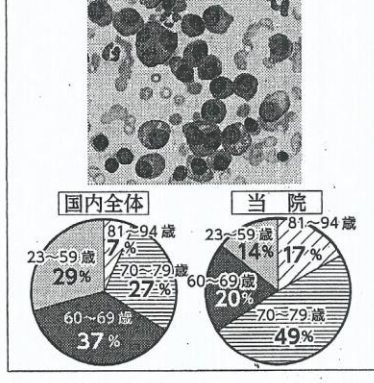


図2. 骨髄腫細胞と骨髄腫年齢分布



## 製鉄記念室蘭病院・黒田裕行血液腫瘍内科長

1960年代から抗がん剤による治療が行われてきましたが、国内では1995年(平成7年)まで5年生存率(診断されてから5年後に生存している割合)は約30%でした。また、10年生存率は約10%でした。その後、移植治療の組み合わせで、若年発症の生存率は上昇するも、移植非適応の患者さんの生存率は近年まで改善されてい

18日(土)セミナー  
なお、今月18日午後3時から、製鉄記念室蘭病院がん診療センター大講堂で、「悪性リンパ腫と多発性骨髄腫」をテーマにしたセミナーを開催します。参加無料、予約不要ですので、ぜひご参加ください。